

国号「日本」の「本」はどのような意味か

大形 徹

はじめに

国号「日本」が作られたのは、7世紀あたりと考えられている。しかし、その当時、その言葉が、どのような意味をもつのかについては明確な説明がない。

(1) 祢軍墓誌⁽¹⁾(六七八)(二〇一年発見)「日本餘嚙據扶桑以通誅(日本)の余嚙、扶桑に抛りて以て誅を^の通れ」

ここに「日本」という言葉が使われていた。祢軍は六七八年に死去しているため、現在、「日本」が確認できる、文献、考古学的に最も早い例となる。⁽²⁾この「日本」に関しては、当初、国号とされたが、のちには文脈から、東の方角をあらわすとされるが、⁽³⁾富谷至は「日本」は百濟、「扶桑」は倭とする。

(2) 井真成(六九九―七三四)墓誌(二〇〇四年発見)

「国号日本(国、日本と号す、または国号日本)」の四文字があった。これは七三四年のものと考えられている。

(3) 唐、張守節『史記正義』(七三六)は、五帝本紀「虞舜」の「東長、鳥夷」に「按武后改倭國爲日本國」と記し、夏本

紀「夏禹」の「鳥夷卉服」に「又倭國武皇后改曰日本國」と記す。

文章を素直に読めば、いずれも「按ずるに武后、倭国を改めて日本國と為す」「又た倭国、武皇后改めて日本國と曰う」と読むことが可能である。これだと、則天武后が「倭」を「日本」に改めたということになる。しかし、歴史的にはそのようなことは確認できない。そのため、「按ずるに武后のとき倭国を改めて日本國と為す」(又た倭国は武皇后のとき改めて日本國と曰う)と「のとき(の時)」という言葉⁽⁴⁾を補って読めば、則天武后の時に、「倭」という呼び方が「日本」に改められたと解することはできる。しかし、張守節が、どのように理解していたのかはわからない。

(4) 後晉、劉昫撰『旧唐書』(九四五成書) 日本

「日本國者、倭國之別種也。以其國在日邊、故以日本爲名、或曰、倭國自惡其名不雅、改爲日本」(日本國なる者は、倭国の別種なり。其の国日辺に在るを以ての故に日本を以て名と為す、或いは曰く、倭国自ら其の名、雅ならざるを惡みて、改めて日本と為す) ※ここには年代は記されていない。

(5) 宋、王溥撰『唐会要』⁽⁵⁾(九六一成書) 倭國

咸亨元年三月、遣使賀平高麗、爾後繼來朝貢則天時、自言其國近日所出、故號日本國、蓋惡其名不雅而改之。(咸亨元年(六七〇)三月、使を遣わし、高麗を平ぐるを賀し、爾後繼いで来たりて朝貢す。則天(在位(六九〇-七〇五)の時、自ら言う「其の国、日の出づる所に近し、故に日本国と号す」と。蓋し其の名の雅ならざるを悪みて之を改む)

ここでは、使者が自ら国号を日本と改めた理由を述べたことになっており、それが則天武后の時だったということになる。

(6) 宋、宋祁撰『新唐書』(一〇六〇成書) 東夷

「天智(在位六六八-六七二)死、子天武(六七三-六八六)立、死、子總持(持統六九〇-六九七)立、咸亨元年(六七〇)、遣使賀平高麗(前1世紀-六六八)、後稍習夏音、惡倭名、更號日本。使者自言、國近日所出、以爲名」。(天智死し、子の天武立ち、死し、子の總持立つ、咸亨元年(六七〇)、使を遣わし高麗を平ぐるを賀す、後ち稍く夏音を習い、倭の名を悪み、更めて日本と号く。使者自ら言う、「国、日の出づる所に近く、以て名と為す」と)

ここは『旧唐書』(九四五)より成書の遅い『新唐書』(一〇六〇)の記述だが、『旧唐書』にはない咸亨元年(六七〇)が記されている。

(7) 朝鮮の『三国史記』(一一四三-四五成書)の新羅本紀、文武王(六二六-六八一在位)六七〇年

「倭國更號日本、自言近日所出、以爲名(倭國更めて日本と号く、自ら言う、「日の出づる所に近く、以て名と為す」と)とみえる。

記述は新羅に対してなされたようにみえるが、『新唐書』そのまま

である。『三国史記』(一一四三-四五成書)は『新唐書』(一〇六〇成書)よりも遅いが、『新唐書』と同じく六七〇年の記事としている。

(8) 一条兼良(一四〇二-八一)の『日本書紀纂疏』(一四五五-五七)は、「日」や「本」について、「漢字」という観点から、それまでにはなかった考察を加えている。この書は、『日本書紀』の注釈書である。そのため、「日本」の「日」と「本」について、それぞれ説明が加えられている。ここには四説がひかれている。そのうち、「本」について、言及されているのは二説である。

(9) 本居宣長『国號考』(書林)、天明七「二七八七」、柏屋平助、錢

屋利兵衛

「日本(ニホム)比能母登(ヒノモト)」という。

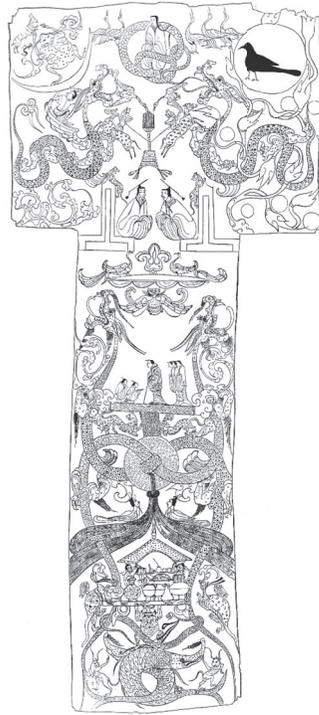
年代を確認するときの判断基準は考古学的資料であれば、そこに記された年代による。文献資料であれば記された年代と、その文献の成書年代を考慮しなければならない。①から⑦までは考古学資料については、そこにあらわされた年代、文献資料については、記録された書物の成書年代にもとづいて排列した。

これらのことを踏まえた上で、とくに日本の「本」について、考察したい。

一、扶桑

(1) 日(太陽)を生み出す生命樹としての扶桑

① エジプトの生命樹



馬王堆帛画の扶桑と太陽

- ② バビロンの生命樹と太陽
 - ③ 三星堆の扶桑と太陽
 - ④ 戦国漆匣の扶桑と太陽
 - ⑤ 『莊子』在有篇の扶搖（＝扶桑）の枝と鴻蒙（太陽神）と雲將（雲）
 - ⑥ 前漢、馬王堆帛画の扶桑と太陽
 - ⑦ 後漢の太陽と鳥と扶桑
 - ⑧ 百花灯
- などが扶桑の系譜としてあげられる。（参考文献、論文参照）

(2) 地名・国名としての扶桑

唐、姚思廉（五五七―六三七）撰『梁書』（六三六）卷五十四、列伝第四十八、諸夷、東夷には、高句驪、百濟、新羅、倭、文身、大漢、扶桑とあり、倭、文身国とともに扶桑国が紹介されている。

扶桑国在昔未聞也。梁普通中有道人称、自彼而至。（扶桑国、在昔未だ聞かざるなり。梁普通中（五二〇―五二七）に道人称する有り、彼れ自りして至る）。

扶桑国のなまえは、昔は聞いたことがない。梁国の普通年間（五二〇―五二七）に、道人がつぎのようにいった。扶桑からやってきました。

そのあと、以下のように詳しく紹介される。

扶桑國者、齊永元元年、其國有沙門慧深、來至荊州。説云、扶桑在大漢國東二万余里、地在中國之東、其上多扶桑木、故以爲名。扶桑葉似桐、初生如笋。國人食之、實如梨而赤、續其皮爲布、以爲衣、亦以爲錦。作板屋無城郭、有文字以扶桑皮爲紙：（扶桑国は、齊、永元元年、其の国、沙門慧深有り、来たりて荊州に至る。説きて云う、扶桑は大漢国東二万余里に在り、地、中国の東に在り、其の上、扶桑木多し、故に以て名と為す。扶桑の葉、桐に似、初め生ずること笋の如し。国人之を食らい、

国号「日本」の「本」はどのような意味か

実、黎の如くにして赤く、其の皮を續ぎて布と為し、以て衣を
為り、亦た以て錦と為す。板屋を作るも城郭無し、文字有り扶
桑の皮を以て紙と為す…。

扶桑国は、斉、永元元年（四九九）、その国の沙門（修行者）
の慧深が中国にやってきて荊州に至った。かれのいうには、扶
桑は大漢国の東二万余里にあります。その地は中国の東にあり、
その上には、扶桑の木が多くあります。そこで（扶桑国という）
名としたのです。扶桑の葉は、桐に似ていて、生えればかりの
ときは笋（＝筍、たかむな・たけのこ）のようである。国の人
はこれを食べ、実は梨のようで赤く、その皮をつむいで布にし、
それで衣をつくり、また錦とする。板屋を作るが、城郭はない。
文字があり、扶桑の皮を紙としている…。

唐の李延寿の作った中国の南北朝（四二〇―五八九）の南朝の
歴史書『南史』（六五九）巻七十九列伝第六十九も、夷貊下、東夷、
高句麗、百濟、新羅、倭、文身、大漢、扶桑、とみえ、紹介され
る内容は、前掲、『梁書』と同じ。

このように扶桑は実際の国名としてもあらわされている。ただ、
その場所が日本なのか、そうでないのかについては、さまざま
説がある¹⁰。

植物の扶桑についても、実際に存在する植物のように記されて

いる。

二、一条兼良の『日本書紀纂疏』の説明

「本」が扶桑の根本だという説

一条兼良の『日本書紀纂疏』に以下のようにみえる。今回のテーマ
にあわせて、「本」にかかわるもののみ取り上げる。また便宜上、番
号をつけた。

（一）日本は吾が国の大名、東海の中に在り、日の出づる所に近し。
韻書に抛るに、説文に曰、日は実なり、太陽の精にして虧けず、圈一
に从ふ。象形なり。通論に天に二つの日無し、故に文に於る圈一を日
と為す。又た本の字は説文に木の下を本と曰ふ、木一に从ふ、其の下
に在り。一は其の処を記するなり。末と義を同す、太陽扶桑を出る
ときは、則ち此の地自ら日下と為る、故に名て日本と曰ふ。東の字
は日本に从ふ、義同じきなり。

傍線を付した場所は、文字の説明である。『説文解字』によれば、
木の下部分が「本」だという。

白川静の『字通』は、

常【本】5画

【字音】ホン 【字訓】もと・もとい・はじめ

説文  

金文 木 本

〔指事〕木の下部に肥点を加えて、木の根もとを示す。〔説文〕六上に「木下を本と曰ふ」とあり、末に「木上を末と曰ふ」とあるのと相對する。本末・本支のように、場所や位置を指示する。

〔訓義〕

1. もと、ねもと、もとい。
2. はじめ、おこり。
3. つねにある、本来の、もとよりの、かなめの。
4. ただしい、まこと。
5. この、その、当該の。
6. ほん、書籍。
7. 糞と通じ、くそ。

とあり、木の下の部分に肥点を加えた形だという。ただ、その訓義にあるように、「ねもと」から「もと」「もとい」の意味をもっている。

一条兼良にもどる。

(2) 唐書の伝に曰く、日本国は和国の別種也、其の国日辺に在るを以ての故に、日本を以て名と為すと、或るひと曰く、倭国自ら其の名の雅ならざるを悪みて、改めて日本と曰う、旧と小国、倭国の地を併す、其の人、朝に入る者多く自ら矜大、実を以ちて対えず、故に中国焉れを疑う、と。

ここでは、「日辺」という言葉が使われている。

〔辺〕について、白川静『字通』は、

〔字音〕ヘン 〔字訓〕くにざかい・あたり・ほとり・はし
〔訓義〕

1. くにざかい、外界と接するところ、祭桌の地。
2. はし、はずれ、かぎり、へり、ふち、はて。
3. かたすみ、あたり、ほとり、そば。
4. いなか、かたいなか、とおい。

〔古訓〕〔和名抄〕邊鄙 師説、阿豆万豆(あづまつ)、文選西京の賦の附訓に安川万字止(あづまうど)とみえる〔名義抄〕邊 サカヒ・ハカリ・スツ・ホトリ／兩邊 コナタカナタ〔字鏡集〕邊 トホシ・ハカリスツ・カタハラ・サカヒ・ハカル・ホトリ・サカシ

兼良は「その国が日(の昇る)辺(あたり)にあるので日本を名とした」という。唐、杜佑の『通典』(八〇一年)辺防一、倭では、「倭一名日本、自云國在日邊、故以爲稱」とされ、自ら「日辺にあるから、そう名づけた」のだと述べている。

〔辺〕という言葉には、「はて、はずれ」という意味があり、もし、自らそう述べたとすれば謙称ということになるのだろう。ただし、だからといって、「日辺」という国名にはしていないのである。

再び一条兼良にもどる。

(3) 一義に曰はく、本は猶ほ始といふがごとき也、陰陽の二神始めて日神を生む、故に日本を以ちて名と為す、

本は始めである。陰陽の二神が始めて日神を生んだ。そこで「日本」を名とした。後世、明の帰有光『雲川集』にも「本者猶言始也：以本爲始」とみえる。

さらに一条兼良にもどる。

(4) 又曰はく、出入を以ちて始終を為すと、此れ日出の国也、隋書の伝に曰はく、大業三年其の王多利思北孤使者を遣はして曰はく、海西の菩薩天子佛法を重興すと聞く、故に朝拜せしむと、兼ねて沙門數十人来りて佛法を学ぶ、其の国の書に曰はく、日出づる処の天子書を日没する処の天子に致す、恙無きやと云々、帝之れを覽て悦ばず、鴻臚卿に謂ひて曰はく、蠻夷の書礼無きもの有らば復た以ちて聞すること勿れと、既に自ら日出処天子と謂ふ、大唐の名づくる所と言ふべからず、故に知る、日本は則ち日出の義也、

ここでは、「本」という文字そのものはみえないが、「日出の国」「日出づる処」「日没する処の天子」等とみえる。ここにあわせれば、日本の「本」は、「国」、「処」をさすことになる。ただ、これを厳密に

適用すれば、「日没する処」の隋や唐も日本と呼びうるようになってしまふのである。

さらに一条兼良にもどる。

(5) 一義に曰はく日は衆陽の宗、人君の表也、故に天に二日無く、地には二王無し、孟子の曰はく、天の物を生ずるや、之れをして本を一ならしむと、其れ人物の生ずるや、皆本を二にせず、乃ち自然の理なり、吾が国二王無く、而して其の王たる者皆日神の玉裔、此れ本を二にせざるの謂なり、

『孟子』は、滕文公章句上。「天之生物也使之一本：(天の物を生ずるや、之れをして本を一ならしむ：)とあり、趙岐の注には、「天生万物各由一本(天、万物を生ずるは各おの一本に由る)』¹⁴という。「本」が一つであるということ述べている。なお宋、朱子は『四書或問』孟子で「一本」について深く考察している。

二、『論語』の「仁之本」、「禮之本」、

『孟子』の「一本」

『論語』学而に、有子の語として、「其爲人也孝弟、而好犯上者、鮮矣。不好犯上、而好作亂者、未之有也。君子務本、本立而道生。孝弟也者、其爲仁之本與」とみえる。ここで「本」という文字に注目したい。「君子は本を務む、本立ちて道生ず。孝弟なる者は、其れ仁の本¹⁵為るか」とみえる。

八佾には、「林放問禮之本。子曰、『大哉問。禮、與其奢也、寧儉。喪、與其易也、寧戚。』」とみえる。ここでも、「林放、礼の本を問う」という言い方である。

『日本書紀』にみえる十七条憲法には、『論語』に近い表現がみえる。

四曰。群卿百寮。以禮爲本。其治民之本。要在乎禮（四にいわく。ぐんけいひやくりょうは。れいをもつともとなせ。それたみを おさむるのとは。かならずれいにあり）。

ここでは、「以礼爲本。其治民之本」と、「本」が二つもあらわれる。『論語』の「礼之本」を踏まえて、さらにそれを「民を治める本」にまで展開させているのである。十七条憲法のこの部分は儒教であるが、その儒教を集約した言葉が「本」なのである。

『論語』では「君子は本を務む、本立ちて道生ず」と、「本」という言葉が重視されている。この「君子務本、本立而道生、孝弟也者、其爲仁之本與」の部分に対して、欽定四庫全書『論語纂疏』巻一、宋趙順孫撰、朱子集註は、「務専力也。本猶根也…」とし、「本は猶は根のごときなり」と述べる。つまり、「本」とは「根」であるという解釈である。そのあと、「言君子凡事専用力於根本、根本既立則其道自生」と「根本」という熟語として説明されている。『論語集説』巻一、宋蔡節編、学而第一も「…則根本既立而仁之爲道、亦由是生」と「根本」として説明されている。先にみたように、白川静も「木の根もとを示す」と述べている。「本（もと）」として使われていながら、本来は「根」

こ」であることが確認されているのである。

ここでわかることは、本は樹木の根本ねもとでありながら、ものごとの根本ほんを示すものとされているのである。そして『論語』では、「仁の本」「礼の本」とされ、さらに、さき一条兼良があげたように、『孟子』では「一本（本を一にす）」とされているのである。

さきにも述べたが、『通典』に「倭一名日本、自云國在日邊、故以爲稱」と、日本の使者が謙遜して、「日辺」にあるから「日本」と名づけたとしている。けれども、そのことにより、「日辺」という国名にしたわけではない。「本」を選ぶことに意味があったのである。

三、富本錢の「本」

「富本錢」の七曜（日月木火土金水・家紋）文様の「日」に着目して「旋読」で読めば、「富・（日）・本」と並び、「日本を富ます」と読むことができ、国号錢とみなしうる¹⁵。



15
今井貞吉
『風山軒泉話』
1889年。

この富本錢は、国号「日本」と連動させる一組のものとして作られたのではないかと思われる。そうであれば、「富日本（日本を富ます）」という意味を潜ませた国号錢なのかもしれない。中国の貨幣「漢興」「涼造新泉」「太夏真興」は、いずれも「漢（成漢）」「涼（北涼または前涼）」

「大夏」という国名が入っている。これは国名を発揚させようという意識があるのだろう。「漢興」「真興」は年号でもある。その場合、国号・年号銭ということになる。ちなみに、その視点で考察すれば「和同開珎（和銅の年に作った珎「おかね」）」は対読して「和開同珎（和「倭」が作った銅「同」の珎「おかね」）」と読むこともできる。これは二種類の読み方で読めるように工夫した貨幣であるかもしれない。いずれも国号あるいは年号を意識した貨幣であり、中国および周辺に国号や年号を知らしめたいと願う気持ちが表れているように思われる。

そう考えたときに「富本銭」に「本」の文字が含まれるのは、国号の「日本」と密接に絡んでいると考えたい。



富本銭 1999年〔明日香村飛鳥〕
(奈良文化財研究所提供)

発掘された飛鳥—20世紀の飛鳥考古学—
飛鳥の考古学図録①

一九九一年 飛鳥時代の総合工房跡で数千点の木簡が発見された。そこに「天皇」の文字もあった。富本銭もそこで出土している。天武朝で「天皇」と呼ばれたのだが、富本銭の制作は、「天皇」という称号とも関わっているように思われる。そして「天皇」の「天」と「日本」の「日」は当然、結びつくと思われる。

四、「にっぽん」それとも「にほん」？

日本銀行券の一万円、五千円、千円札には隠し文字がある。小さく「ニ」「ホ」「ン」と書いてある。千円札には桜の花びらの中にも同様の文字が記されている。これらを見ると名称は、「ニホン」だと思いたくなる。ところがローマ字で記されるのは、いずれも「NIPPON GINKO」であり、「ニッポン」なのである。同じ紙幣の中で二通りの読み方が混在しているようにみえる。どちらが正しいのだろうか。

唐代には「入声」という発音があった。これは「つまる音」と呼ばれているが、現代中国語では消滅し、地方にのみ残っている。唐代に日本の使節が中国に国号を「日本」に決めたことを報告したとき、当時の中国人が発音したのが、「ニッポン」だったのである。先にみた『史記正義』の「按ずるに武后、倭国を改めて日本国と為す」「又た倭国、武皇后改めて日本国と曰う」と則天武后が日本国としたというのは、発音の面だけから考えれば正しいのかもしれない。日本の使者は、日本国内では、「ひのもと」あるいは「やまと」と呼んでいたかもしれない。しかし、「日本」という漢字二文字を中国にもっていったときに、「ニッポン」という発音を教えられたのではないかと思う。つまり、

日本という国号は、漢字という中国語であらわされ、その読み方もまた、やまとことばの「ひのもと・やまと」ではなく、「ニッポン」という当時の現代中国語であったということになるのである。

なお日本語のなかに中国語の入声が入り込み、つまる音の「促音便」となったとされる。ただ、日本語の表記には、小さい「っ」をあらわす方法がなく、濁点や半濁音（にっぼんの「ぼ」もあらわす習慣がなかった。そのため、「ニッポン」という発音は「にほん」と表記されたのである。しかし、「にほん」と書いているため、「ニホン」と読む場合も当然、でてくる。中国語の「ニッポン」という発音は日本語の中に入り込んで、「ニッポン」「ニホン」に分化し、それがそのまま現在にいたるまで続いているといえる。

紙幣の隠し文字「ニホン」は、その歴史の意味と発音と表記のズレを正しく認識しており、あえて「ニホン」と記述していると思いたい。中国福建省福清出身の林雪雲¹⁹さんの方言で話す「日本」は現代語の *Ripian* ではなく、「ニッポン」である。これは、唐代の発音の入声が地方の方言の中に残っていると考えられている。

おわりに

日本の「本」が、たんに「日」がのぼる地を示すだけならば、「日辺」でもよかった。「本」の文字が使用される「日本」という語を選んだことには、深い意味があると思われる。典故である。一条兼良は、その博学により、さまざまな典故を丹念にたどっている。岩橋小弥太は、その説を詳細に紹介したうえで、「なるほどその博学であるところは

よく示しているが、説くところは共だ曖昧である」と述べ、その概略を以下のようにまとめた。「(1) わが国は東海日出所にあるから日本という。(2) 本は始の義で、二神始めて日神を生んだからだ。(3) 隋書を引いて、わが国書に自ら日出処の天子という。日本は日出の義で、これはシナから名づけたものではない。(4) 日は人君の表で、わが国は二王無く、その王も皆日神の裔で、本を二にしていなから日本というのだと、かく四説を立てた」²¹。

そして、「(1) は (3) に通じるようでもあり、(2) は (1) に通じるようでもあるが、ともかくも明らかに四説であつて、そして自分ではどの説を主張するのか、明らかにしていない」と批判している。

岩橋は重厚な歴史学者だが、「典故」ということの意味を取り違えている。答えを1つに絞る必要はないのである。さまざまな典故が複雑にからみあう中にこそ深い教養と知識を示すことができるのである。一条兼良は、「日本」という言葉を選定した当時の知識人が、中国の儒字をもととする教養知識にもとづいて、日本の「本」を選んだとみているのである。そして「本」には深奥な意味が潜んでいるとみているのである。そして、それは「辺」のような薄っぺらい言葉とはまったく異なっていることがわかる。

チングス・カンの孫のフビライの建てた「元」は正しくは「大元」で、儒教の經典『易経』の「大哉乾元（大いなるかな乾元）^{おお}」にもとづく。後世、「元」と一文字で呼ばれてしまうのは不本意であろう。これは王朝創業の天子の出身地にもとづいた単純な王朝名ではないのである。「日本」も同様である。そしてそれは中国のそのような命名よりも

むしろ早いのである。それまで中国から「倭」と呼ばれていた。それをたんに好字の「和」におきかえ、「大」をつけた「大和」を国名とはしなかったのである。「日（太陽）」が昇る樹木である扶桑の根「本」（ねもと）にある土地の国として「日本」としたのである。「本」には「根っこ」だけでなく、物事の「根本」という意味がある。儒教には「仁の本」「礼の本」があり、さらに十七条憲法にも「礼之本」がみえ、それはさらに「治民之本」として展開している。

「日辺」ではなく「日本」という語を選んだことは、すばらしい選択であった。「本」という漢字の内包する意味の広がりや深さは、「辺」とは比べようもない。そしておそらく、「富」「日」「本」とも読み取れる銭貨の「富本銭」とも一連のものであろう。

「日」にかぎっていえば、天武朝での「天皇」の称号ともつながっているように思われる。「天武」も「天皇」も「天」なのである。そして「日」が「天」にのぼり照らすことを考えれば遠く天照大神に淵源を発しているともいえる。

「扶桑」と「日本」は唐代以降の文献にもしばしば登場する。ペアとして使用されているのである。「日本」は「扶桑」をも包摂しており、扶桑・日本と二つが合わさることによって、「日（太陽）」が昇る樹木である「扶桑」の根「本」（ねもと）にある土地、となったのである。

※なお最近、李訓墓誌が発見され、「日本國朝臣脩書」と記されていた。これは吉備真備が書したもので、最も初期の日本人が書いた「日本国」である。

注

- (1) 王連龍「百濟人祔軍墓誌考論」『社会科学戦線』社会科学戦線雑誌編委会、二〇一七。葛継男『祔軍墓誌』についての覚書―附録・唐代百濟人関連石刻の釈文―、専修大学社会知性開発研究センター東アジア世界史研究センター年報(6)、一六五―一九七、二〇一七、三。
- (2) 岩崎は普書にみえるという説を紹介するが、確認できない。
- (3) 欽定四庫全書、『旧唐書』卷一百九十九上、後晉司空同中書門下平章事劉昫撰、列傳第一百四十九、東夷、高麗、百濟、新羅、倭國、日本
- (4) 欽定四庫全書、唐會要卷九十九、倭國
- (5) 『日本書紀』では「持統」。
- (6) http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/r105/r105_01772/index.html
- (7) http://archive.wul.waseda.ac.jp/koshor/ru03/ru03_00431/ru03_00431.pdf
- (8) 国号考 四十四 ウ
- (9) 昇仙図(馬王堆三号漢墓帛画『馬王堆漢墓文物』)による。作図溥江)部分、曾布川寛、高豊信責任編集『世界美術大全集 東洋編第二卷 秦・漢』小学館、一九九八、三四九頁。
- (10) 岡本健一『蓬萊山と扶桑樹―日本文化の古層の探究』思文閣出版、二〇〇八 参照。
- (11) 岩橋小弥太「一四三―一四五頁は、「東」の字は日本に从ひ」と「木」を「本」にかけて訓読している。また後出の小林も「日本」の横に(本カ)という注釈をつけ、岩橋同様に読んでいる。「東」は「日」と「木」を合わせたものなので「本」ではない。
- (12) 欽定四庫全書『旧唐書』卷一百九十九上、後晉司空同中書門下平章事劉昫撰、列傳第一百四十九東夷、高麗、百濟、新羅、倭國、日本では、「日本國者、倭國之別種也。以其國在日邊、故以日本爲名。或曰、倭國自惡其名不雅、改爲日本。或云日本舊小國、併倭國之地、其人入朝者、多自矜大、不以實對、故中國疑焉」。
- (13) 前掲『旧唐書』では「日本國者倭國之別種也」。ここでは「倭」ではなく「和」が使われている。
- (14) 四庫全書『孟子注疏』卷五下、漢、趙氏注。宋、孫奭音義并疏。滕文公章句上
- (15) 大形徹「年号と貨幣―漢興・大夏真興あたりを起点として―」、水上雅晴『年号の思想と文化』八木書店、二〇一九、一二―一四八頁、および「和同開珎と中国」松浦章編『東アジアにおける文化情報の発信と受容』雄松

堂出版、二〇一〇、二四三―二九五頁を参照。

(16) 前掲「年号と貨幣―漢興・大夏真興あたりを起点として―」一二二頁。

(17) 今井貞吉『風山軒泉話』(日本銀行金融研究所貨幣博物館、二〇一七)、

一八八九、一八頁。二〇一九、九検索 <https://www.ines.boj.or.jp/cm/research/senpu/fuhonsen/pages/fuhonsen6.html>

(18) 飛鳥の考古学図録①発掘された飛鳥―20世紀の飛鳥考古学―編集明日香村教育委員会文化財課発行(財)明日香村観光開発公社平成二二年三月、最古の貨幣と最古の天皇木簡より。

(19) 大阪府立大学博士課程修了。

(20) 『日本の国号』吉川弘文館1997新装版、一四五頁。

(21) 同上。

(22) 同上。

(23) 天皇の称号については、福永光司「天皇と紫宮と真人―中国古代の神道思想(六三七)九五五―九七三頁、一九七七、〇七を参照。

(24) たとえば、七言律詩、贈宗人胡以興號海觀。何年鼓棹泛鴻濛、畫捲蓬瀛入望中、老蜃噴空開翠嶼、巨鼇吹浪濕珠宮。天浮析木星河外、地盡扶桑

日本東、説與井蛙應不信、更攜銀漢附鵬風。(四庫全書、元、胡天游撰『傲軒吟稿』)において、「扶桑日本」とみえる。

参考文献

著書

○富谷至『漢倭奴国王から日本国天皇へ…国号「日本」と称号「天皇」の誕生』臨川書店二〇一八、三京大人文研東方学叢書、4

○神野志隆光『「日本」国号の由来と歴史』講談社二〇一六 講談社学術文庫、[2392]

○小林敏男『日本国号の歴史』、吉川弘文館二〇一〇 歴史文化ライブラリー三〇三

○岡本健一『蓬萊山と扶桑樹―日本文化の古層の探究』思文閣出版、二〇〇八

○専修大学・西北大学共同プロジェクト編『遣唐使の見た中国と日本』、朝日新聞社、二〇〇五。

○神野志隆光『「日本」とは何か…国号の意味と歴史』講談社二〇〇五 講談社現代新書、

○大和岩雄『「日本」国はいつできたか…日本国号の誕生』大和書房一九九六 改訂版

○吉田孝『日本の誕生』岩波新書、一九九七

○岩橋小弥太『日本の国号』吉川弘文館一九九七新装版

○岩橋小弥太『日本の国号』吉川弘文館一九七〇

○下澤瑞世『日本の国号の比較文化史的考察』『出版者不明』、「一九二五」高橋龍雄『大日本国號考』同文館、一九〇〇七初版。一二再版

大日本国號考／(0003.jp2)

目次／(0009.jp2)

緒言／1 (0013.jp2)

大八洲国／4 (0015.jp2)

葦原中国／14 (0020.jp2)

水徳国／17 (0021.jp2)

倭奴国／19 (0022.jp2)

大和国／22 (0024.jp2)

東海姫氏国／32 (0029.jp2)

秋津島／35 (0030.jp2)

敷島／39 (0032.jp2)

内木綿眞迹国／41 (0033.jp2)

磯輪上秀眞国／44 (0035.jp2)

浦安国／45 (0035.jp2)

細戈千足国／47 (0036.jp2)

玉墻内国／49 (0037.jp2)

言舉せぬ国／51 (0038.jp2)

言靈幸国／55 (0040.jp2)

言靈助国／55 (0040.jp2)

扶桑国／60 (0043.jp2)

君子国／64 (0045.jp2)

皇国／66 (0046.jp2)

神国／69 (0047.jp2)

日本／77 (0051.jp2)

ジャパン／85 (0055.jp2)

○本居宣長『国號考』『書林』、天明七「一七八七」、柏屋平助、錢屋利兵衛 http://archive.wul.waseda.ac.jp/koshu/ru03/ru03_00431/ru03_00431.pdf 「日本(ニホム)比能母登(ビノモト)」と云。国号考 四十丁 ウ

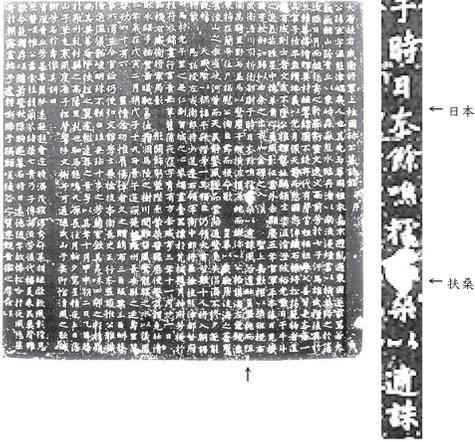
論文

○大形徹『「莊子」にみえる植物―扶搖・冥靈・大椿・櫟―』、『山口裕文・

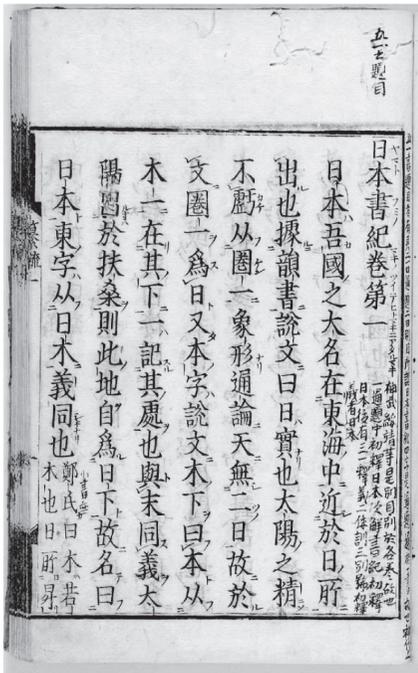
国号「日本」の「本」はどのような意味か

- 金子務・大形徹・大野朋子編著『中尾佐助 照葉樹林文化論』の展開―多角的視座からの位置づけ』北海道大学出版会、二〇一六。
- 大形徹「字説「東」と扶桑が結びつけられる理由」、『漢字學研究』(4)、一五五―一七六、二〇一六。
- 葛継勇「『日本』 国号東亜登場時間考―对中国実物資料及中日文戯的比較」(『鄭州大学学报(哲学社会科学版)』二〇一一年6期)。
- 葛継勇「井真成墓誌を巡る諸問題」、藤田友治編著『遣唐使・井真成の墓誌』、ミネルヴァ書房、二〇〇六。
- 前野みち子「国号に見る「日本」の自己意識(日本像を探る)」、言語文化研究叢書(5)、二七―六二、二〇〇六。
- 葛継勇「研究余録―井真成墓誌についての基礎的考察」、『日本歴史』(六九〇)、七〇―八〇、図巻頭二頁、二〇〇五。
- 住吉朋彦「日本書紀纂疏―宋学受容の一面」、『国文学解釈と鑑賞』六四(三)、六七―七四、一九九九、三。
- 氣賀澤保規「新発見『李訓墓誌』と吉備真備」、『東方』四七四号、二〇一〇、九。

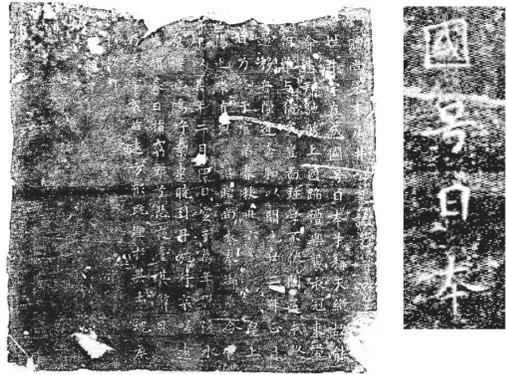
(立命館大学衣笠総合研究機構特別招聘研究教員(教授))



称軍墓誌 王連龍 百濟人『称軍墓誌』考論



<http://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200020493/viewer/9>
一条兼良『日本書紀纂疏(日本書紀纂疏)』卷第一、国文研蔵



井真成墓誌 『遣唐使の見た中国と日本』